

主体的・対話的で深い学びについての一考察（その2）

1 主体的・対話的で深い学びについて

- 深い学び：教科・学習内容の本質に迫る学習課題を1時間に1つ、または、2つ設定する。
- 対話的な学び：一人ひとりが対話的な学習をするために、班やペアを活用する。
- 主体的な学び：一人ひとりが考える場面、一人ひとりが発言する場面、一人ひとりが書く場面を設定する。

2 授業の流れ

(1) 授業の流れ

学習課題の提示 → 課題への自力解決 → 全体交流にて解決に向かう → ふり返り

(2) 学習課題

○教科・学習内容の本質に迫る学習課題を1時間に1つ、または、2つ設定する。

(3) 自力解決

- 班の形になって、個人で取り組む。
- 子どもへの指示 『分からなければ、「ねえ、どうするの?」と聞きます。』
「聞かれたら必ず応えます。」
「自分も分からなければ、自分も分からないと伝えます。」

(4) 全体交流

ア) 課題解決の場合（①②③④の順番で）

- ①分からない人から発表する。「困っている人はいますか?」
 - 「どこで困っているか。」「何に困っているか。」からスタートする。
 - 「どこまで分かっているか」、「分かっていることは何か」を確認することも一方法である。
 - 分からない人がどこで困っているかを共有し、その子が分かるように意見交流しながら、みんなで学習課題を解決していく。
- ②「これは、どうかな〜?」と迷った答えのある人が発表する。
 - 迷った答えに関連づけながら意見交流し、みんなで学習課題を解決していく。
- ③少数意見から発表する。
- ④「これは自信がある」という答えのある人が発表する。

イ) 感想や意見を述べ合うの場合

- 班内で全員が感想や意見を述べあう。
- 全体にぜひ広めたい感想や意見がでた班に発表させる。

3 全体交流での教師の言葉

- 子どもの発言に対して、つなぐ言葉だけを言う。
 - 「関連してどうですか。」「他はどうですか。」
 - 「今の意見は聞こえましたか。」：発言者の声が小さかったとき
 - 「先生は今の意見が良く分からなかったので、誰か助けて。」：発言内容が分からないとき
- ※教師が子どもの意見を繰り返して言ったり(オウム返しをしたり)、その子の意見を分かりやすく言い換えて説明しているということはないか。→ 先生が言ってくれるから、友達の見解を聞く必要がなくなる。

4 主体的な学び

- 学習課題を1時間に1つ、または、2つ設定する。 / ○学習課題には班の形になって個人で取り組む。
- 一人残らず全員に考えさせる。
- 班やペアを使って全員に発表させる。 → 発表するには考えなければならない。
- 全員に自分の考えを、または、自分の言葉で書かせる。 → 書くには考えなければならない。
- 一時間の授業の中で、班やペアの形になって考える場面、書く場面、が必要。